



梅雨の明け頃

～清楚系黒髪メガネ女子が巨根中毒墮ちするまで～

基本CG24枚+α
差分込み本編 125枚
+テキスト無しver.
総合計 223枚

「今度の日曜日？」

「うん、ユウスケ君と一緒に遊びに行きたいなと思って」
「空いてるよ。ありがとう、誘ってくれて」

同じクラスのユウスケ君に、告白したのがひと月前。
私の淡い恋心は無事に実り、今はこうして幸せな下校時間を
一緒に過ごしている。

私たちはクラスではお互い目立たない存在で、
どちらかといえばみんなと騒ぐよりも
図書室で本を読むのが好きだった。



そういうわけで、教室はいつも居心地がわるい。
息苦しさから図書室に逃げ込むと、彼はいつも私より先にいた。

「いつも来てますね」と彼に声をかけてみると
「君もいつも来るね」と返された。

私が図書室に来ている理由を、なんとなく察しているような
表情だった。

適当な本を選んで席に座り、本を読むふりをして
こっそり彼を観察する。

そうした日が続いたある日、
私は彼を好きになっっていることに気がついた。



梅雨に入り、じめじめとした毎日だったが、私はこの季節がけっこう好きだ。

雨音がいろんな音をかき消してくれるし、窓を打つ雨粒を眺めているとなんだか気持ちが落ち着くのだ。

『梅雨って好きですか？』

つきあう前、天気の話題になりユウスケ君に聞いてみた。すると、彼は窓の外空を見て、『静かだし、なんだか時間がゆっくり過ぎるみたいだね』と。

それを聞いてつい顔がゆるんでしまったけど、多分見られてはいないはず…。



——日曜日の予定は図書館に決まった。
初めてのデートとしては少し地味かもしれない。

でも、私たちがはしゃぐくらいがちょうどいいのだ。

「それじゃあ日曜日、駅前12時に待ち合わせだね」

「うん、わかった。楽しみにしてる」



そう約束して、私たちはそれぞれの家路につく。

ユウスケ君が振り返ってくれるかもしれないと思い、

彼の後ろ姿が見えなくなるまで、その場に立っていた。

「…日曜、楽しみだな」

ひとり言は雨に吸い込まれて消えていった。

帰ってからお母さんに何かいいことでもあったの？と聞かれたけど、

「なんでもないよ」と答えておいた。

そして約束の日曜日――

雲ひとつない晴天になった。
梅雨はたしかに好きだけど、せつかくのデートなんだから、
晴れたほうがいいに決まっている。

ユウスケ君の表情も心なしが明るく見えた気がした。
…いや、いつもはもっと暗そうだが、そういう意味では断じてない。



「ユウスケ君・図書館の後、街の方に行かない？」
「そうだね、時間もあるしどこかに寄ろうか」
午後のデートプランも無事に決まった。

図書館ではお互いが好きな本を借り、
私たちは街の中心部に向かった。
ごくごく普通の、どこどこにもいる男女が、
ありきたりなことをして楽しんだ。

それでも街はいつもより華やいで見えた気がした。



「「あつ……………」」

人通りの少ない路地に入り、いかがわしいピンクで彩られた建物を見て、思わず歩みを止める。

——こつてラブ…ホ…だよね…

ユウスケ君も私の隣で立ち止まって建物の方を見ている。
真昼間に男女が二人、ラブホテルの前でたたずんでいる…

気まずいなあとが、周りの目とか、
初デートなのとか、もういろんな考えが頭を駆けめぐる。

でも…………

ドキマギした気持ちを抑えつつ、
勇気を出して、ユウスケ君の方を振り向く。

「…ユウスケ君はさ…エッチなところって…興味ある…?」

彼の顔は真っ赤になっていて、「クン」と一度頷いた。

心臓がバクバクと大きな音をたてている。
私の顔も多分真っ赤になっていた。



何もしてくる様子のないまま、彼は黙って立っていた。

曲がり角から男女の話し声がちやうに近づいてくる…

私は彼の手をギュッと握り、そのままラブホに向かって歩きたした。

初めてつなぐ彼の手は、大きくてあつたかかった。

彼はその手を握り返し、黙って私についてくる。

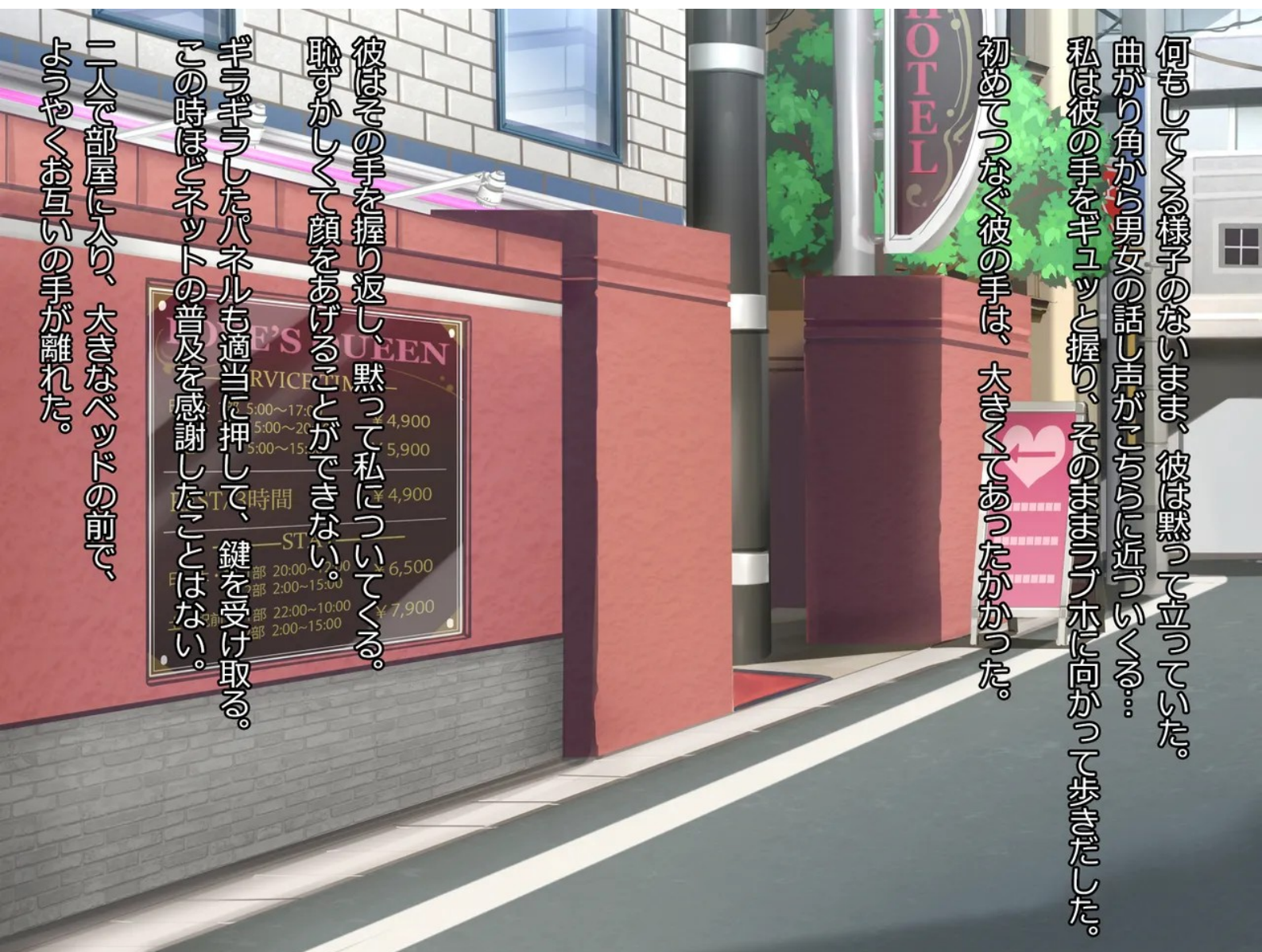
恥ずかしくて顔をあげることができない。

ギラギラしたパネルも適当に押して、鍵を受け取る。

この時ほどネットの普及を感謝したことはない。

二人で部屋に入り、大きなベッドの前で、

ようやくお互いの手が離れた。

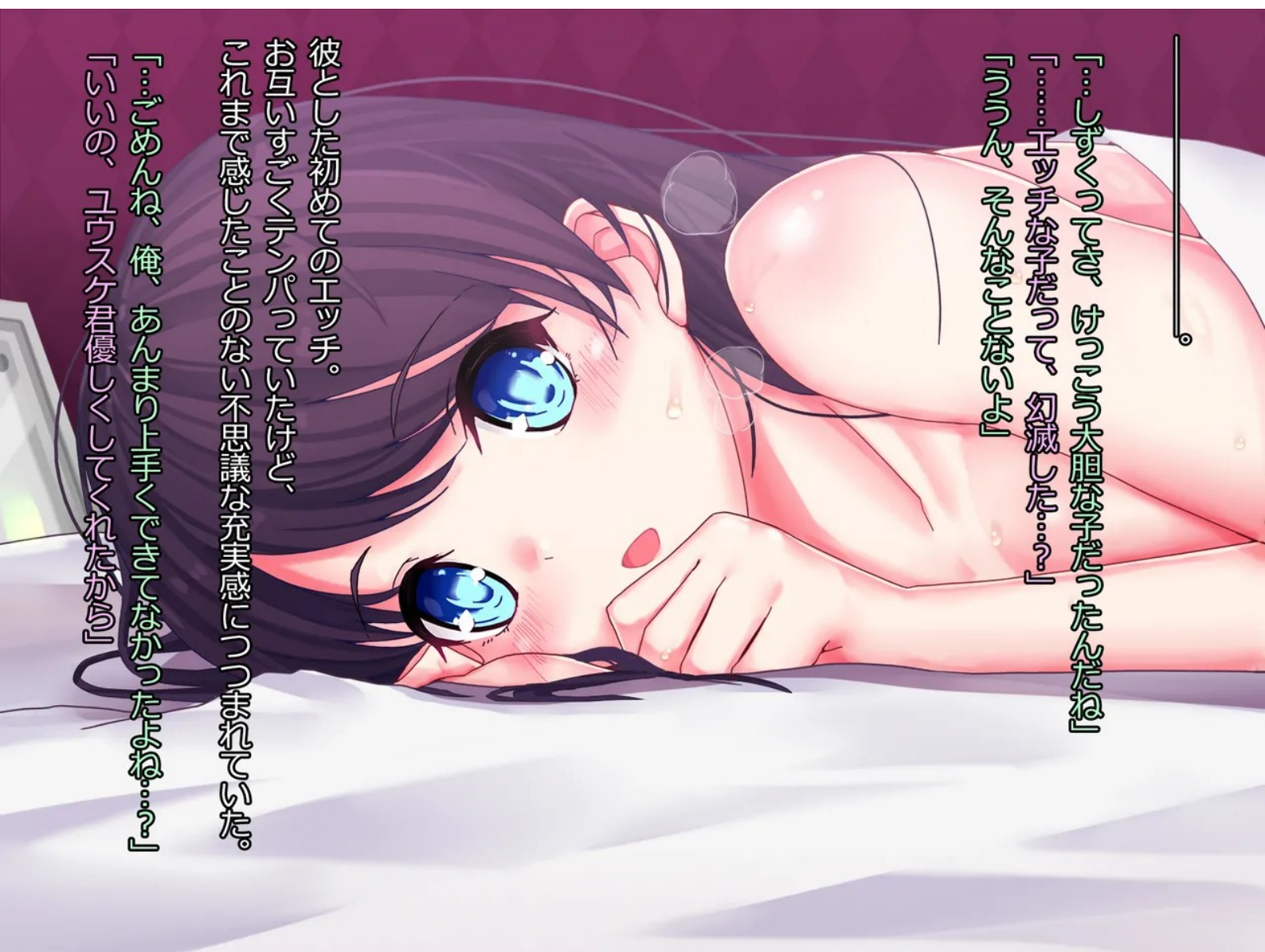




「…しずくつてき、けつこう大胆な子だったんだね」
「…エッチな子だつて、幻滅した…?」
「うん、そんなことないよ」

彼とした初めてのエッチ。
お互いすごくテンパっていたけど、
これまで感じたことのない不思議な充実感につつまれていた。

「…ごめんね、俺、あんまり上手くできてなかったよね…?」
「いいの、ユウスケ君優しくしてくれたから」



——本当はもっとシンドイしかった…なんて…

でも、これ以上エッチな子だと思われなくなかったし、
…ユウスケ君もずっと緊張していたんだと思う…。
すぐに終わっちゃったけど、私はそれでも満足していた。

ユウスケ君がそっと頭を撫でてくれて、私は目を閉じる。

どちらかともなく、唇が重なりあう。



——ユウスケ君のエッチは…痛くはなかった、けど…
これから気持ちよくしてくれる…んだよね…

ホテルを出ると外は暗くなっていて、私たちはそのまま家に帰った。
私たちの関係は、昨日とはまるで違っていた。

漠然と抱いていた「好き」という感情が、
なにかしつかりしたカタチになった実感があった。

ユウスケ君も同じことを思っているに違いない。

お互い梅雨が好きなように——



次の目――

いつもは真面目に勉強する授業中も、
頭の中は昨日のハッチの思い出でいっぱいだった。



斜め後ろの席に彼がいる。
何度も振りかえりたくなるのを我慢して
授業に集中しようとする。

でも…

——セックス、しちゃったんだよね、私たち…

クラスの男子とエッチをして、
今、私たちは普通に授業を受けている。

日常と非日常のギャップがあまりにも大きくて、
私はまだ夢を見ているみたいだった。

そんなふわふわした頭を現実に戻すかのように、
ポケットのスマホに一件の着信がきた。

バイブが小さく一瞬だけ鳴る。

私は机と壁のすき間でこっそりとスマホをのぞきこんだ。



見たことのないアドレスからメールが来ていた。
メルマガかと思ってスマホをしまおうと思った時…

「件名：しずくちゃんへ、昨日はお楽しみでしたね」

——私の名前が書いてある…？誰からだろ…？



私は何かに吸い寄せられるように、そのメールを開いてしまった。

画面に表示されたのは…見覚えのある風景——
そして、いかげしい装飾がなされた建物に入る男女の後ろ姿…

——これ…って…わたし…っ!?

そこに映し出されていたのは、ラブホに入る私たちの姿だった…。
スーッと血の気がひいていく…。
手の先が震えて冷たくなっていく。



知っている人が見れば絶対に私たちだと分かってしまっただろう
写真にはお互いの横顔がばっちりと写ってしまっていた。

——うそ…昨日、見られてたんだ…でも誰がこんな…

写真の下に文章が続いていた。

『昼休み、旧校舎3階男子トイレの個室で待っていて』

それだけ書かれてメールは終わっていた。

夢のような心地からは完全に目が覚めていた。



……私は途方にくれていた――

写真の送り主はいったい何を考えているんだろう……

未知の恐怖から、結局、ユウスケ君には相談できずにいた。

どうやって写真を消してもらおうか、なんの案も浮かばないまま、あっという間に昼休みの時間になってしまった……。

——グラウンドで誰かの遊んでいる声が聞こえる

一体誰があんなメールを…？

興味本位でホテルに行ってしまったことに、今さらながら後悔の念が沸く。

トイレに座って、5分程経った頃だろうか。
誰かがこちらに近づいてくる気配を感じた。

すたっ…すたっ…すたっ…

足音が聞こえる。

その足音はだんだんと大きくなり、

私の入っている個室まで一直線に向かってきた。

——ドアの向こう側に、メールの送り主が…



——ギィィィ……

錆ついた蝶番が不快な音をたてながらゆっくりと開く。
そこには負のオーラをまとった男の子が一人、
こちらを見下ろして立っていた。

——同じクラスの葛男（くずお）君…。

汚くて、しかも臭いとクラス中から仲間はずれにされている男子だった。

近くで見るとボサボサの髪の毛にしわだらけのシャツ。
すでに少し酸っぱい臭いがトイレにこもり始めていた。
生理的に受けつけないし、正直、私も避けていた男子だった。



「メール、見てくれたんだね」

低く濁った声が個室内に響く。

「……あ、あなたが、メールを送ったんですか……？その……写真のこと、なんですけど……」
「分かってるよ、消してほしいんでしょ？」
「………はい……」

ゴクン——とつばを飲みこむ音も相手に届きそうなほど
不気味な静けさがあった。

「……しずくちゃんってさ、真面目そうな見た目のわりには
ちゃんとヤルじやないかな？」



ねっとりとした口調。
爬虫類のような目つきで、私をじろじろとねめつけながら
彼はいきなりセクハラを始めた。



「あんなどうにも行くなんで、僕はイケないことだと思っなあ」
「…それは、分かってます…そうですけど…でもっ…」
「でも…？ なに？」
「……………」

こういう時の言いわけがさっと思い浮かばない。

クラスの中には「行ったことあるよ」と話していた子たちもいた。でも、私はそういうところに行くのはもつと大人になってからだ。内心では思っていただけに、いざ咎められると何も言い返せない。

私の心の隙を察知してか、彼の向ける無機質で冷たい視線に、思わず身の毛がよだった。



「……この写真をさ、学校中にばらまいたらさ、先生から呼び出し受けちゃうよね。グフフ…親にもきつとすぐに連絡がいつて、最悪一人とも…停学か…自主退学か……」



「そんな…! まって、それだけは、やめてください……!」
「ん…僕ってけっけっけ気分屋なんだよねえ…どっけっけかなあ」

「…ど、どうしたら、写真をばらまかないでくれますか…?」
「…僕の、彼女になってくれたら考えてあげてもいいよ」
「…え、彼女に…ですか?…でも、私、ユウスケ君と付き合ってるから…」
「……………ふうん……………じゃあいいよ…短いときあいだったね。サヨナラ。」

葛男君は途端に不満げな態度を漏らし、
踵を返してそこから立ち去るつもりをする。

「ま、待って!…分かりました…お、おつきあい、します…!」
私、葛男君の彼女になりますからっ!…!」



思わず言ってしまった、
…が、もう遅かった。

それに写真を拡散させない方法は、今はこれだけしかなかった。

——でも、彼女になるって…それってつまり…

「フフ、そうそう、最初から僕の言うこと聞いておけばいいんだよ。
しかも僕も誰にも言わないからさ。しずくちゃんも安心してよ。
僕…『じつそり』ってのが燃えるんだよねえ…」



……やっぱり、私を弄ぶんだ——

葛男君は舌なめずりをしながら邪悪な笑みを浮かべている。
身勝手にむき出しの欲望に恐怖を感じた。

でも…

——ユウスケ君…ごめんね…私、こうしないと…

「…言っこと聞いたら…写真、消してくれますか…？」
「うん、消してあげるよ。僕、嘘はつかないんだ」
「……………分かり、ました……」



私の苦渋の決断を聞くが早いが、
葛男君はおもむろにベルトをガチャガチャと鳴らす。

ニタリと割けそうなほど唾つその口の端から、
よだれがツーツとしたたっても気にもとめず……



ポロンッ！

眼前に現れたのは、あまりにも巨大な肉竿だった。

「……………っ！」

………うそ…これ…葛男君の…こんなの…っ！

ここに来た時からなんとなく分かっていた。

ちねっ！

…まるで品定めをするように私の胸を見ていたから…



私の前腕ほどもある太くて長いペーニス。

ビクッビクッと脈動するそれは、
顔に影を落とすほど見事にそそりたっていた。

先っぽからトクトクと溢れ流れる透明な液体は
鼻にツンとくる生臭さを漂わせ、
私は思わずむせこみそうになる。



「ううっ……けほっ……けほっ……こん、な……こんなのって……」

「これにキスしてよ」

「え……?」

「僕たち、もう恋人同士なんだからさ、キスするの
当たり前じゃない? だから、これにキスしてよ」
「そ、そんなこと、できるわけじゃないですか……!」

突然の無茶なお願いを反射的に拒む。

すると、葛男君はポケットからスマホを取り出し、
さっき私に送った写真を見せつけた。



「僕たち、恋人同士…だよな……？」

三日月形に開く口はまるで悪魔のようだった。

「……う、うそですよ……こ、これに……？」

——お、おチンチンにキスなんて……

ユウスケ君のにもしてないのに……

……でも、逆らうことはできそうない……。

ヤレと言われたことには素直に従わなければならなかった……。

「……は、い……わかり、ました……」



「せっかくだからさ、ちゃんと彼女宣言してから
キスしてほしいなあ。僕がいまから言うセリフを覚えてよ」

「……………」

「……………そんなこと……………」

抵抗しようと口を開いたが、すぐに思いとどまる。

たとえどんな辱めを受けようとも、私はユウスケ君と一緒にいたい。

その一心で、私は頭上から降ってくるおぞましいセリフの数々を
必死で頭に叩き込んでいった。

「ぐんぐん、つめなちゃん、頭いづから簡単でしょっ」

「……………はら……………覚えました…」



「それじゃあお願いね、できるだけ感情込めてないと、何度でも言わせるから」

こんな屈辱的なセリフ、何回も失敗したくなかった。

濁った空気を大きく息を吸い込み、私は意を決して宣言する。

「……私は、葛男君と、お付き合い……します……」

彼女として、どんな……性的奉仕も……拒みません……」

すぐに駆けつけて、身を捧げる……うとを、……」

「あ、うん」

「……うん……」

「それじゃあお願いね、できるだけ感情込めてないと、何度でも言わせるから」

こんな屈辱的なセリフ、何回も失敗したくなかった。

濁った空気を大きく息を吸い込み、私は意を決して宣言する。

「……私は、葛男君と、お付き合い…します…。」

彼女として、どんな…性的奉仕も…拒みません…。」

すぐに駆けつけて、身を捧げる…うとを、…」

「はーんったの」

「……んっ…ふっ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…」

「それじゃあお願いね、できるだけ感情込めてないと、何度でも言わせるから」

こんな屈辱的なセリフ、何回も失敗したくなかった。

濁った空気を大きく息を吸い込み、私は意を決して宣言する。

「……私は、葛男君と、お付き合い…します…」

彼女として、どんな…性的奉仕も…拒みません……

すぐに駆けつけて、身を捧げる…うんを、ハルヒ……」

「はー、ふっ、たのしー」

「……ハルヒ……ふっ……たのしー……ハルヒ……きつもちゅ……」



「それじゃあお願いね、できるだけ感情込めてないと、何度でも言わせるから」

こんな屈辱的なセリフ、何回も失敗したくなかった。

濁った空気を大きく息を吸い込み、私は意を決して宣言する。

「……私は、葛男君と、お付き合い……します……。」

彼女として、どんな……性的奉仕も……拒みません……。」

すぐに駆けつけて、身を捧げる……うとを、……」

「あ、うん……」

「……うん……」

「……うん……」



「それじゃあお願いね、できるだけ感情込めてないと、何度でも言わせるから」

こんな屈辱的なセリフ、何回も失敗したくなかった。

濁った空気を大きく息を吸い込み、私は意を決して宣言する。

「……私は、葛男君と、お付き合い……します……」

彼女として、どんな……性的奉仕も……拒みません……」

すぐに駆けつけて、身を捧げる……うとを、……」

「あ、うん……」

「……うん……」

「……うん……」

言った直後、死にたくなるほど、とてつもない後悔に襲われた。
でも、まだこれで終わりではない。

「じゃあ、誓いのキスを…」

ずいっと腰を前に出す葛男君。

臭い汁が髪や鼻についてしまってもぬぐうことはできなかった。

——ごめんね…っ…ユウスケ君…っ…





目頭が熱くなり、じんわりと涙がたまっていく。
性奴隷扱いされる未来を想像し、体がカタカタと震える。

「これで晴れてカップル成立だね♪
……じつはも、もう我慢できなくなってる……、こっちにお尻むけて…
お昼休み終わっちゃうから、早くっ」
「……はい……はい……」

しぼり出した返事は、葛男君の荒い吐息にかき消されていった…



私はのろのろと立ち上がり、後ろを向き、冷たい便器に手をつく。
手をつくと同時に、スカートは思い切りまくり上げられ、
下半身があらわになった。

ひるっ

——あつ…そんな…いきなり…っ！

見せるのはユウスケ君だけのはずだったのに…
ギョツと便器のふちを握る指に力がこもる。



「今日のしずくちゃんのパンツは黄色かあ…
ふうっ…ふうっ、僕も、黄色って好きなんだよねえ…」

葛男君の生暖かくじつとりと湿った手のひらが私のお尻に食い込み、欲望のまま形をゆがめられていく。

「しずくちゃんはやっぱり安産型だねえ、たくさん子作りできそうだねえ……ぐふっ」

「…ひっ…ひっ…ひあっ…あっ♡いやあ…や、やめてください…」

「……………うっ！あっ…い、いやぁーっ！」

「おお…っ、これがしずくちゃんのおまんこ…っわぁ…毛ボロボロじゃん！」
「ダメッ…見ないで…っ！そんなこと言わないでえ…っ！」

——自分でも気づいていた…と…だっただの…やだっ…見ないで…

クラクラしてきた頭にも葛男君の声だけは届いてくる…
ケツの周りまでびっしり——とか、蒸れてすげー——とか
人の恥部について言いたい放題言われている。



「それ」ほら、なんだか匂いも…クンクン…」じがらかなあ…？」

目の端で見ても分かるほど下手な芝居をうちながら、
葛男君がまたニヤリと口角をあげる。

「…あっ…あっ…あっ…ダメッ…それヤメて………広げちゃいざですっ…
あっ…あっ…ん——っ♡………」



くばあ.....

「.....もっヤダあ.....んや.....ぬるっ.....おなから.....」

くばあ

くばあ

グッ

どれだけ情けなく懇願しようとも、
私はもう生きた心地がしなかった。

鼻先がくっつくほど深く匂いまでかがれ、

ぬちゃ♡

「うっわあ.....すっご.....しずくちゃんのメン」ってうなってるんだ.....
すっげえグッチョグッチョじゃん.....!!
しかも.....匂いもすっばいしきついし.....ドスケブマン」でじゃんか.....」

グチューグチュウ……

確かに、はしたなく濡れているのは自分でも分かっていてた。

私の気持ちに反して、アム」はさっきからグチュグチュと蠢いている。

もうっ……こんな時なのに……なんぞっ……？

「僕っ、もうホントに我慢できない……っ！ し、しづくちゃん……っ！」「ド……あ……あ……そんな……」

グ

グ

グ

背後で葛男君が立ち上がる。

私のお尻は逃げられないようにガッチリとつかまれ、そして…

ピタッと——粘膜同士が触れ合った。

「え…ま、待って、こ、コンドームはっ…?」
「ハアッハアッ…そんなもの持ってないよ…!」

「いや…そんな…生でしたら…妊娠しちゃいます…!」

「へっ、へっ…その時はその時でさ、

ボテ腹で登校して彼氏に見せてあげなよ」

「……そんなこと…できるわけじゃないですか…!」



あまりにも無責任な発言に怒りがこみあげても、
自分に拒否権なんてものはない。

ユウスケ君との学生生活を守るためにも、
恥部を感じる生暖かい葛男君の生殖器を
受け入れざるをえなかった。

涙が頬を伝って便器の上に堕ちる。

幸せな昨日から一転、地獄に墮とされ…
…私はいったい何をやっているのだろう…

「…チツ…分かったよ、次からはちゃんと持ってきてあげよう…」
「…ッ…グスッ…約束、ですよ…」





幸いにも、今日は安全日のはず。
それでも100%じゃない。生のセックスは妊娠の可能性があった。

しかし、私は観念して、こわばらせていた下半身の力をゆるめる。

それが挿入の合図として伝わったのか、
葛男君は低いうなり声をあげながら、
ゆっくりと腰を押し進めてきた。

——グブグブ…グデェウ…「ハァンハァン♡

「はぁ…♡おはぁ…おはぁ…おはぁ…♡」

ハァンハァン♡

ガッ

ガッ

ミニミニと広げながら入ってくる高男君のおチンチンは
圧倒的な密着感であつた。私の一番深いところまで入りこんでいた。

あられもない私の嬌声がトイレ内に響き渡る。
昨日ユウスケ君としたときよりも、
遥かにすごい衝撃が私の体の中を駆けめぐった。



「やった…童貞、卒業…セックス…生セックス…あーやべえよ…」
「…あう…みうっ♡…あう…みうっ♡…♡」

ゲキョ

ゲキョ

ビク

ビク

おっ

うわごこのように「やばう」とびびやく葛男君は
ブルブルと快感に震えている。
その振動が股間に打ち込まれた熱い肉棒を伝って
私の膣粘膜を甘くねぶりあげていた。

ういっ
ゲキョ

グチュグチュと粘膜同士が直接愛しあう音が
下腹部から聞こえてくる。
大好きな彼氏ともまだしていない生の生殖行為に、
私の股間は涙を流していた。

「ぶううっ…すごい声出てたね…外まで聞こえたんじゃない？」
「…あっ♡いや、ウソ、っんん…♡そんな声…出てないですっ…」
「こんな「マン」漏らして、ホントはスケベなんじゃない？」
真面目そうなフリして、淫乱で、ドスケベの、くせだっ…」
「いやっ♡まって、違、あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

だんだんと抽挿が激しくなる。
内臓も一緒にめくれて出て行ってしまうようなエラの刺激に
また思わず声が漏れ出てしまう。



ギリギリまで引き抜き、また一気に秘裂に肉ビラを押し戻す。
背中を伝って脳髓まで揺さぶられるような強烈な快感の波に
脂汗をにじませ、気をもつていられないようにひたすら耐えた。

「あああ♡……あう……ユウスケ君……これ、セックス……
セックス……ずう♡……あう、あう、あああ……！」

——ユウスケ君……私……ごめん、コレ……私ダメ、かも……♡

いんらん
：ユウスケくん……

お尻をつかむ手は万方のようにさらに締めあげられ、
左右に揺さぶることもできず、ただただ葛男君の劣情を
膣奥で受け止めることしかできなかった。

もう、私の声は旧校舎中に丸聞こえだろう。

ここには誰も寄り付かないはずだけど、
万が一、誰かがいたらさっさと様子を見て来てしまつて違いはない。

そうなる前は写真以前に私の学校生活は終わる。
ユウスケ君にも当然迷惑がかかる。

そう頭では分かっているけど、処理しきれない官能的な刺激が
不本意なあえぎ声となつて喉からしぼり出されていった。



「あふっーんお…♡おチンチン♡おおんっ♡」「レ深いっ深すぎい♡
おん♡んうっ♡おおーっ♡ん おおおおー♡」

さつき見たガチガチに反り返った巨大な勃起が
目に焼き付いてはなれない。

見たこともない私の膣内がグジュグジュに
食い荒らされている光景が脳裏に浮かんだ。

生まれたての小鹿のように脚がガクガクと震えても、
しっかりと支えられたお尻は崩れ落ちることもできず、
私は獣のように泣き叫び続けた。

おおっ？
おおっ！
おおっ！
おおっ！



「あああ♡ああ——♡チンチン、ね、固い、すごい♡」
「チンチンじゃない、チンポって言うっ」
「あうあう♡は、ひい…♡チ、チンポッ…♡」
あう…いやあう、おチンポがうっ、そんな…うう…言えませうっ
「……そう、ならう…うう、だあ……」

ぱん♡
ぱん♡

—パチユンッ♡パチユンッ♡パチユンッ♡パチユンッ♡

「ああああ——♡おっほおほ♡ほおほ♡」めんなじやい♡
いいますっ♡チンポ、おチンポッ♡
ほおおっ♡チンポチンポチンポオオッ♡

ほわっ

ゴッ
ゴッ

ゴッ

夕架





3.
h h
♡ ♡

そんなこと……ないですよ、
ああん♡あん♡
ああん♡「♡」

——だって、ユウスケ君のおチンポは…

ちんぽからずっと思いが伝えないようにしていたのだ…っ！
その言葉でユウスケ君のペニスがフラッシュバックしてしまう…

……………白くてかわいらしい

「マジユマロみたいだな、彼のペニスを……………」

「…………いやっ違うのおっ♡チンポの、大きさじゃ、ないんですっ♡
思い出させないでえっ！お願いっ今は、
だ、だめえっ♡おっほ♡ほおお♡」

ほっほっほ

「……………は、あつこのおひささくおひささく……
オラツミえっ認めろっー」

いぬん♡
なさい♡

私はかぶりをふり、昨日のユウスケ君の子供ちゃんぽを忘れようとした。

葛男君は私の本音を引き出そうと、

より激しく私の中をぐずりあげ、

一番奥の子宮口をねぶるようにいじめ始めた。

——♡コリッ♡コリユッ♡クチュックチュッ♡

「あまあっ！あっ、それずいぶんずいぶん♡」

[illegible]

あああ——♡
「あああああ——♡」

「なら——こう、だっ！」

♡

だめー、おねえ

「クソッ…なかなかしぶといな…」

ギョポンッ♡——と卑猥な水音が結合部から出て、
葛男君は凶悪極太ペニスを抜き去った。

「キヤうんっ♡…はあっ…はあっ…、私、絶対、言いませんから…っ！
彼を裏切るようなこと、言いません…‥‥‥キヤア!?」
「なら…お仕置が必要、だねえ!?」

グルンッ——と葛男君は私の脚を持ち上げ回転させる。

私の身体は便座のふたの上に乗り、
抱えあげられた脚はカエルみたいにみつともなく天井を向いた。

グチュ♡

グチュ♡

「…ハアツ…いつ、いやあっ…やめてっやめてくたさいー!」
「じたばたするな! 写真バラまくぞー!」

外からの光で下半身は明るく照らされ、
私の膣穴は丸見えになっていた。
ぽっかり空いた穴からは白い泡が垂れ、
湯気が立ちのぼっている。
ぷんぷんと自分でも匂うほどに濃厚なメスフェロモンを発している。

「ちゅん」
「ちゅん」

「……もう、やめてえ…お願いですから……」

——これ以上されてしまったら…私は……

サッ
やあ

糸一本でつながっていた私の支えが…
認めたくなかった…だってこのままじゃ…
私、ユウスケ君のこと……

「……ごじでやめるわけないでしょう……がっー」

「…あう、だめ、ダメエー——いちゃいちゃおあおあ——うっ」



「いゃああああ——んっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」
 「んあ——♡あ——♡んおあああ——♡」



狙いをすました肉槍が、グジュグジュにむせび泣く膾粘膜を再び食い荒らしていく。

彼の剛直をいともたやすく飲みこんでいく私のおまんこはもはや葛男君の従順なメス奴隷になっていた。

——その時、私は本能的に察してしまった…

ユウスケ君のでは…あんなのでは生涯決して
味わえない…

——喜びを。



自くて深い悦楽の濁流にのまれ…

私の中でスイッチの切り替わる音が聞こえた…



ガチガチの熱い肉杭が奴隷マンコに打ち下ろされるたび、
行き場のない快感が身体中ではじけまわった。

『あんなマシユマロチンポよりも、極太の巨根で孕みたい』

そんなメスの本能をくみ取った従順な奴隷マンコは、
優秀なオス遺伝子を恵んでもらおうとウネウネと蠕動を始める。

ユウスケ君っ…今だけ、今だけ消えて――！

写真…とりかえすまでだから…それまでは、お願いっ！





肉欲にあらがえない私は、精神を保とうと
脳内で勝手に言い訳し始めた。

子宮口はさっきまで自分をいじめていた亀頭のことなど忘れ、
ディープリキスしているかのようにクチュクチュとイチャつきだした。

「あああ♡私のおまんこ♡ あああー♡壊れちゃってん♡♡
バカになっちゃってると♡なんなの♡、我慢できない♡♡！
おチンポ逆らえないの♡♡ああああ♡♡ あああー♡♡♡
いっ♡すい♡べ♡う♡ー♡♡♡い♡れ♡好♡わ♡♡好♡わ♡♡好♡わ♡♡♡♡」



もう孕まされる恐怖など消えていた。
昨日愛した彼氏のこととも忘れ、写真のこととも忘れ、
今はただ、のぼりつめる「ト」しか頭にない。

降りきった子宮も亀頭の先端をくわえこみ、あさましくもチュウチュウ精液を吸い出そうとしている。

「おおおーイクぞおー出すぞ、中に、おおおおおッー」
「イクッ♡イクッ♡イクッ♡イクウッ♡イッグウウッ♡♡♡」

「おおおおあああー♡♡ンダッー！アー♡♡
イグウー♡精子出てるっー！ダメッ中出しアクメとまらないー！
イグウ♡んおー♡んあああああー♡♡」

限界まで膨らんだ亀頭が一気にしじけ飛ぶのを感じた。
大量の熱い精液が私の子宮内になだれ込み、
ビチャッビチャッと内壁を焦がしている。

感じたことのないほどの快楽の奔流が体の中で暴れまわった。
葛男君が私をキツく抱きしめるせいで身動きもとれず、
暴れまわる絶頂を解放できない苦しみが襲った。



「おおほお♡おっほ♡しゅーいっユウスケくんじゃ無理っ♡
ごめん、ごめんごめんん——っ♡んほおお あああっ♡」

強烈な快感が脳の中でバチバチとはじける。
かろうじて伸ばしたつま先や舌を通して徐々に逃がしていくが、
それでもとどまることのない深い絶頂の愉悅に、
私の眼はグリンッと脳の裏側を見る。

最愛の彼氏を裏切り、肉欲におぼれ、溶けきった顔は
誰にも見せることのできない醜態をさらしていた。



「…ふう…よし、昼休み終わるしそろそろ戻るか…
………おつと…ちよつと………失礼して…」

いまだ陰茎を膣の奥深くに挿しこんだまま、
一度ブルツと大きく身をふるわせた彼は、
だんだんと満足そうなほっとした表情を浮かべ始めた。

「…おつ……ふうー…」

ぶるるっ

私の中でまだ何かが出ている…

まただんだんと下腹部のあたりが生温かくなり、
容量を超えた液体がとろとろあふれ出してきた。



「あ、あう♡…うそ、これ、ちが♡」

2/2
1/2
1/2

ハズ

できない。



官を汚しつつく
ていた。

ぽろぽろ

あ...
いやあ♡

「ふうースッキリした♪妊娠いやだって言ってたから
精子きれいに洗い流しておいたよ♪
じゃあしずくちゃん、また明日連絡するね、授業遅れないようにね」
「あ...あはあ...♡おじいちゃん...いや...いやあ.....」

いろんな体液が混ざり合い、
吐き気のするほど強烈な性臭のこもった個室で
私は性の悦びを刻み込まれてしまった。



「…あーあ、こんなグズグズの顔しちゃって…知ーらねっ」

今はもう最愛の人も思い出せない。

だんだんと目の前が暗くなっていき――

――私の意識は、そこで途切れた。





「…あの、まだ、降ろしちゃ…ダメ…ですか……？」

…私はまた高男君に呼び出され、あらたに辱めを受けていた…

…トイレでの凌辱の後、結局私は放課後まで気を失っていた。
なんとか身なりを整え、誰にも見つからないよう急いで帰宅した。



電車でちらちらとうっすちを見てくるおじさんがいた。
生臭い情事の臭いがスカートの中から漂っていたことに気付かれ、
私は顔を赤くして隣の車両に移った。

帰ってすぐにシャワーを浴び、中も念入りに汚れを落とした。

スマホを見るとユウスケ君から連絡が来ていたけど、返信する気力もなかった。

布団をかぶって泣き声をぐぐもらせているうちに、私は、疲れて眠ってしまった。



登校してすぐ、昨日急にいなくなったことを先生から注意された。『気分が悪くなつて…』とが、苦しい嘘しか出てこなかったけど、どうにか納得してもらえたみたいだった。

ユウスケ君にも同じ嘘をつく。

彼もその嘘を信じてくれたみたいで、本気で心配してくれていた。その純粋な心に、私の胸はチクチクと痛んだ。

——生中出しセックスが気持ち良すぎて気を失ってました
——葛男君と浮気していたの

もちろん、そんなこと言えるわけがなかった。

席についてすぐに葛男君からメールが届く。

『昼休み、昨日のとなりの空き教室に来て』

メールには短く、それだけ書かれていた。

もう昨日のように肉欲に流されたりしない。
人生の汚点を、私は墓場までもっていくつもりでした。

二度とユウスケ君を裏切らないと決心し、
スマホを固くにぎりしめた。



私は今、乳房の撮影会を行っている。
葛男君の命令で胸を…、写真を提供しろという。



ぐつぐつと寝ないといけなかった。

「……ぐっ♡……あ、あの、もう…おねがい、します…」

確かにここには滅多に人は訪れない。
でも、学校という環境で、けっして100%ではなかった。
いつ誰が来るかもわからないこの状況で、
緊張と不安で私はずっとビクビク震えっぱなしだった。

——昨日はトイレで叫んじゃったけど…でもこんなのって…

葛男君はスマホで私の胸を撮影している。
しかもこんな時にも関わらず、
私の乳房の先端は熱を持って張りつめていた。

「…それもちゃんと…消して…ぐっ♡なんですよね…」
「もちろん消すよ、これは暇つぶしついでに…」
「しずくちゃんに会えない時用のオカスさ」



「……！（……オカスって……最低です……！）」
葛男君に聞かれないよう小声で静かに反抗する。

恥ずかしさから黙ってうつむいていると、
葛男君から死刑宣告のような命令が下った。
また、言うてほしいセリフがある、と。



「……！」

「……なっ！言えませんっ！……そんなこと……！」

「……へえ……？昨日あんなにイカせてもらっておいたのに……？」

『チン采すっっっ♡』『アクメとまらないっっ♡』って叫んだのは
……どの誰だったかなあ……」

「……そ、それは……その、違うんですっ！……！」

あの時は、頭がおかしくなっ……！」

…葛男君の言う通りだった。

確かにあの時の私は、自分でもどうかしていたと思う。
目の前の快楽に流されすぎていた。
気持ち良すぎて満たされるあまり、
自分から中出しをねだったなんて…

葛男君は昨日見せたような悪魔のような

笑顔を浮かべて私を見ていた。

自分より弱い存在を見つけた時の、彼の癖なのかもしれない。

…！



「…そう、言わないならいいよ別だ。じゃあここでオワカレだね」
「あつ…待って…わ、わかりましたっ…言いますから…」

…どのみち後戻りはできない。

私は意を決して、カメラのレンズを見る。

「ハッ」音が鳴り、肺いっぱい空気を吸い込む…。



「…ゆ、ユウスケ君…見ていますか…？」

…私は…これから、葛男君の…

スマホの向こうで葛男君がうなずき、次のセリフを催促してくる。

「…おチンポの…掃除を、します…」

「昨日、葛男君に…な、中出しセックスで…
気持ちよくしてもらった、おれです…く、葛男君専用の、
おチンポ…清掃員にな、なっちゃいました…
…ごめんね…うっ…うっ…ごめんね…ごめんね…」
「………よし、完璧だよ」
「………うっ…うっ…ごめんね…」

半同意のうえとはいえ、またユウスケ君を裏切るようなことを
言ってしまった事実にも、早くも決意が鈍りそうになった。

ユウスケ君はあんなに本気で心配してくれたのに…私は、まだ……



「じゃあそろそろ、お掃除を、シテもらおうかな…」
そう言いつつ、葛男君はスマホをポケットにしまう。
股間のあたりをガチャガチャしてスポンを脱ぎさった。

下半身をぶら下げたままにじり寄った葛男君は
私の頭をおさえつけ、床に正座するよう命じる。

従順な奴隷としての自覚が芽生え始めたのが、
私の身体は素直に命令に従った。

私の眼前に、昨日さんざん泣かされた極太の陰茎が脈動している。



——比べちゃいけないのは分かってる…

…それでも、圧倒的な生殖能力の差をつきつけられてしまう…
彼の小指のようなモノとは比べ物にならないほど、
長くて、太くて、あと臭いもきつくて…
そしてなによりも…すぐたくましい葛男君のペニス…

——これは…カタチだけだから…
本気じゃない…無理やりさせられているだけだからね…？



「えっ……うっ……うっ……え……そ、そんな……」

そして悲しいことに、昨日の私の膣も同じ臭いがしていたことを
思い出し、私は深く傷ついた。

ぷんぷんと濃厚なオスフェロモンが顔中にまとわりつき、すでに奴隷としての私の脳は甘く痺れはじめる。

黒い大木のようなおチンポ。
あたりに広がる濃密で生臭い性臭。

——私は、今からこれで……

何をすべきかはなんとなく分かっていった。

多分、口を使つての性奉仕——フェラチオ。

すー

ユウスケ君にはまだしていない……

こんなことなら、こないだのラブホテルの時、

無理やりにもしておけばよかったとすら思う。

生セックスだけでなく、

初めての口淫も葛男君に捧げることになるなんて……



反りかえって力強く天井を向くおチンポを
葛男君はグググと手で押さえつけ、口元によせてきた。

——すごい…ビクビク脈うってて、
血管も浮き出て…先っぽからまた透明な汁が漏れている…

ツーツと垂れるその汚汁は私の胸を濡らし、
スカートの上に着地した。



「じゃあ口開きして口開く」
「……は、さ……」

私は口の通り口を開いておちおちと舌を出す。

「はあっ……はあっ……んあ……あ……」

葛男君のイカ臭い精臭が空気を伝って口に広がる。

まだ味なんてしないはずなのに、

苦そうな、しぶそうな味がする……。そんな錯覚をおぼえた。

オエツとえづきそうになるのを必死にこらえ、舌を伸ばす。

残り数センチ……数ミリ……。目と鼻の先にある汚れた肉棒……

んい
んい

…アッ…♡

とろとろ舌が触れた。

亀頭から漏れてくる汁がぬめつとじていて、生温かく想像していたよりもよっぱかった。

「…んあ…うっえ……ぴちゃ…ぐちゅ…」
「ロ…ぶちゅ…」

ん
ん

ん

ん

ん

—これ…もしかして葛男君のおしり…？—

「あ…なにこれ、やっぱ…ヌメヌメしてて気持ちいいわー」
「やつ…んあ…ハアっ…ハアっ♡…んちゅ…ペロ…レロオ…」

ペロッとチンポを竿から舐めあげる。

彼のずっしりとした性器の重さを舌で直に感じた。

そのままペロツ…ペロツと舌だけを動かして愛撫を続けると、大きな傘の裏に、ネバネバとこびりつく白いカスを発見した。

悪臭の原因だろうか、昨日の精液の残りかもしれない。それも舌でほぐり出すように掃除し、きれいにしていく。

「んえ…レロオ、…んっ、ぶはあ…んっ♡レロ、レロオ…」

私の唾液でふやかされたそれは、奉仕をしている間に溶けていき、胃の中へすべり落ちていった。

口の中にまったりと広がるクラスメイトのチンカス。それは脳髄をしびれさせ、ペニスと舌の境界を鈍らせていく。



床についた膝がだんだん痛くなってきた。

私の口臭がだんだんひどくなっていく屈辱と敗北感。

そして、また脳裏に浮かぶユウスケ君のマシユマロチンポ…

はぁっ
はぁっ

ユウスケ君のおチンポなら、多分この先つぽと同じくらい…

「ハア…んう…レロア…ちゅ…んちゅ♡…んあ…ハア…ハア…」

「しずくちゃん…そろそろ、くっ…くわえて…」

「…んあ…は、はい…ハアッ…わかり、ました…んええ…」

葛男君の毛深くて筋肉質な太ももに手をつく。
あごが外れるんじゃないかと思うほど
限界ギリギリまで口を開けて亀頭をほおほった。

数分おしゃぶりしたただけでは肉棒に染みついた刺激臭は、
おちるはずもなく、独特の生臭さが鼻を突き抜けていく。

うん！

うん！

「ぐえっ おおおっっ！ おえっ…げほっげほっ…お おおおっっ…！」

思わずえづいてしまい、
自分でも聞いたことない声が喉奥からしぼり出された。

——くちゅっ…息が…しほらふっ…ぐんっ…!

喉から粘り気のあるえづき汁がどんどんあふれ出てくる。
えづき汁でコーティングされてすべりが良くなった極太ペニスに、
葛男君も腰を震わせて応えてきた。

グググ

「おっっおおお…すげえよ、しずくちゃんっ！
あったけえっ…チンポとろける…っ！
喉…っトロットロで…もっ…とおっっ！」

ガッ!
!?

葛男君は私の頭をガツと掴み、
その極太のおチンポをゴリゴリと突っ込んできた。

「ぐおおっおびゅー……！ おおおおびゅー！……ぐおおっおびゅー！……」

鼻の頭が陰毛にうずもれる。

フサフサとくすぐる陰毛は汗でじっとり濡れていて、濃くなった体臭は吐き気をさらに倍増させた。

「ベキだろ… 毎毎の… 旦那様 旦那様…
旦那様 旦那様… 旦那様…」

「あーとまんない、これやばっ、気持ちよすぎっマジでやばい！
歯あたてないでよう？ 歯たてたら全部へし折って
総入れ歯にするからっオナホにしてやっからなあッ！」

頭上から鬼畜の所業のような言葉を浴びせかけられる。
私は絶対に歯をたてないようだ。
そして空気を求めて必死に口と喉をこじ開けた。

葛男君の肉棒は私の喉の粘膜をこそぎおとすように
出たり入ったりを激しく繰り返す。

——何度も…何度も…何度も何度も何度も…

んんん！！

んんん！！
おっ！！



口のまわりや胸元は二人の分泌液でドロドロに汚れてしまっていた。
脳に酸素が足りていない。
どんどん意識が遠のいていき、眼球が裏側を向き始める……

ーはあッ

あッあッあッ

「きつたねえなあ、おい口からよだれが水漏れしてるぞ！
このっ…中古便器！おい便女！お前は今日から俺の彼女兼、
性処理肉便女だ！わかつたか！このマソ豚が！」

「…はっ…はっほおっ…わがり、まじだあ…」

抵抗するとむしろ苦しいことを悟り、
もうなすがままに葛男君の歪んだ性欲を受け止めていた。

乱れる髪の毛も汚れる制服も気にならなくなり、
空気を吸えるほんの二瞬の解放感だけを求めていた。

あきらめたことで喉の筋肉のこわばりが解けたからか、
葛男君の肉棒を喉粘膜で柔らかく包むことができた。



葛男君の怒張の限界で喉が圧迫される。

早く、出して、射精……早く……

——もう、私も…限界、だから……

「イッくぞおお僕のザーメン、受け止めるおおおっ おおおっ！」

ビュルッ……ジュンジュン……

「んんんんんっ……んぶっ……」おおおおっ……
んほおっ……んっ……

ドブユルッ

!!

喉を焦がしそうなほど熱い肉棒から濃厚なマグマが噴き出てきた。

ドブドブの沸騰しそうな精液が口腔内をあっという間に埋め尽くし、
せつかくまいにしたおチンプを再び自渾に「コーティングしていく。

「んんんっーっおっ、んっーんぶっっっっっ
んんっむっーっぶっっっっっっっっっんんっー」

必死に溢れてくる無数のオタマジヤクシを胃におためしっ。卵子を探して私の体内を泳ぎまわっている様子が脳裏をよめる。

んんんん

ドブッ

ドブッ

「んんぶっ、んくっんくっ………いっん……ん……ん……」
「おお、ああっすげえっ……また……ん……ん……」

葛男君は腰を依然つきだしながら大きくのけぞり、天井を見上げたままプルプルと震えていた。オスの本能に従って最後の一滴まで残らず私に吐精しよんぞ、ビクッビクッと脈をうたせる。

んんんん

ドブッ

——本当に、何から何までユウスケ君のよりも…すごい……

彼は水みたいな薄いのが数滴コンドームに貯まっていたけど、葛男君のは濃厚な固形でゼリーみたいにプルプルとした精液だった。

ブエ…
びんぎゅ…

ビクッ

げい…
ふ…

精子ゼリーが胃にべちゃべちゃと溜まっていた。これからこんな濃厚なのを出され続けたら、ずっと口が精液くさい女の子になってしまう。

——ユウスケ君と話す時に、

口がイカくさいって思われたらどうしよう…

ビクッ

とめどなく出てくる汚泥汁に、
口をリスのように膨らませながら吐糟に耐え続ける。
しかしその許容量はすぐに限界を超え、
無様な鼻ちようちんとなって逆流してきた。

絶頂を通り越した葛男君の力がようやくゆるみ、
頭を万力のように締めあげてた手から逃げ出すことができた。

げほ

げほ

「げほおっ……ゼエゼエっ……かっは……げほっ……げほっ……」



息も絶え絶えのまま、なんとか後ろの床に倒れこむ。

葛男君は追い打ちをかけるように残りの獣汁を顔中にまき散らし、

数十秒後、ようやく排泄が終わった。

ネバついた精液が髪の毛の隙間に染み込み、頭皮に到達している。
顔全体が生臭い臭気に包まれている。
呼吸をするたびに胃の奥の方から酸っぱい味と腐った臭いがした。



「……はあ……あつ……あ♡……けふつ………」

私は呆然と天井を見上げる。
なにか大事なものを失ったときの
喪失感がこみあげてきて、
息苦しかった時とは別の涙が頬を伝った。

——キンコンカン——

「……ちんぷんしょう……もうこんな時間が……先に戻ってる……」



ガラガラとドアを開けて葛男君は教室に戻っていった。
数分して、私も朦朧としながら重たい体を起こし、
顔を洗って教室に戻った。

——私はその日、家に帰ってから気づいてしまった。



…私の下着が、じつとりと湿っていたことに。

お昼休みは毎日呼び出されるようになった。
教室を抜けだし、トイレでセックスをして自席に戻る日が続いた。
毎日のように股を開き、彼女兼性処理肉便女として
彼の獣欲を受け止める日々。

いつユウスケ君にバレてしまうかと、
最初は冷や冷やしていたけど、

今日もまた、あの人が図書室に入っていくところを見かけた。



葛男君はコンドームをしてくれるようになったけど、
忘れたと言って生でセックスを受け入れることもあった。
そういう日は、下着の中をグチャグチャにして過ごすハメになった。

ユウスケ君と一緒に下校した日、
「何か匂わない？」と聞かれたときは、顔から火が出るかと思った。
今のところ、まだ妊娠はしていない。



…葛男君に抱かれてから一ヶ月が経つ。
ユウスケ君はすごく鈍感な人だ。
毎日お昼休みに私が他の男の子とセックスしているのに
まだ気づいていないみたいだった。

ある日の放課後、『最近図書室にこないね?』なんて
笑いながら聞かれたから、私も笑顔で、
『最近お友達ができてそっちに行ってる』って答えておいた。

その日はそのまま黙っていた。

もう、図書室には行っていない。



「じゅるるっ♡ん、はあっ♡あんっ♡ああ♡…じゅるっ、ちゅぱっ♡ちゅっ♡」

最近是对面騎乗位にハマっている。

ピッタリ息のあったセックスができたときは
葛男君は2回射精してくれる。

最初はガチガチの勃起チンポで子宮口をこづき上げられながら射精して、
残り時間を甘勃起チンポでゆっくり膣ヒダをねぶられながら過ごす。
というのがいつもの流れだった。

じゅぽっ

じゅぽっ

「んんっ♡あっはあ…♡すっ♡…♡もっ♡とあゝ奥にチヨウダイ♡」
「うお…そろそろイクぞ…♡おおお…♡」

ジュジュジュン…シューン、ジュン、ジュン…

「おっ…♡おお♡ギたあ…おっほ…♡出っ♡…♡」
子宮、「ポッポあたっ♡てゐる♡あっ♡あっ♡ああ…♡」

絶頂の快感が背筋を通って脳を揺さぶられる。
頭の中が真っ白になって何も考えられなくなる。

あゝ♡
あゝ♡
あゝ♡
ひゃー♡

ひゃー♡

「……ふう……しずくちゃんさ、最近彼とシテないの？」
「……あっ♡……はあっ……はあっ♡シテ……ませんよ、あれから一度も……」
「なんで？ラブホ行くほど仲良かったんじゃないの？」

ピロートークに他の男の話をするなんて……
デリカシーのないところじゃ少しムッとしてしまう。

「だって……」
「だって……」

ドゥ……
ぴゅん..



「だってもう、あの人の…ユウスケ君のじゃ、
絶対無理なんです…！初めてしたあの目も、何にも入ってない
みたいだった…！…最初はそれでもいいって思ってたんです…
笑顔で取り繕って…好きなら、大きななんて関係ないって…
でもあなたが…！あなたが…っ！」

もう自分を誤魔化せなかった。

彼とお話するのは楽しい。
一緒にいてドキドキもしたけど…

でも…

「じゃあ、彼にちゃんと言わないとだね」

「……………はう……」

——そろそろ、梅雨もあけようとしていた。



「ごめん、待たせちゃったよね」

「うん、いいの」

「それで…話ってたかな…最近しずく、何かあったの？
図書室にも来ないし、最近一緒に帰ってない、よね…?」

…何かあった…というより、何もナカッタんだよ…



「今日はね…渡したいものがあるんだ…」

そう言っって、私は鞆から「ペリ」のビニール袋を取り出す。

ビニール袋はパンパンに大きく膨らみ、外からでもたくさんモノが詰まっているのが分かる。
それをそっと静かに机の上に置く。

「渡したいものってそれ……なにかな……それは……」
「……………あ、ね、別れてほしいんだ。」
「……………えっ……な、なんで……どづいづ……」



戸惑いを見せるユウスケ君に私はゆっくりと
ビニール袋の口を開いて、中に入っているものを見せた。

「……………うー……………うー……………そ、それ……………」

これは…私と葛男君の愛しあった証。

さっきも一つ追加したものは、てらてら濡れて夕日で光っている。

ピンクや緑、黄ばんだものなど、

様々な色が袋の中にひしめき合っている。

少し漏れているものもあるのか…いや、私の匂いかもしれない。
鼻腔をつきさす強烈な生臭さがあたりに漂った。

そう、

葛男君との……………



——使用済みコンドーム

「…うちのクラスにさ、葛男君っているでしょ…？
……こないだトイレでエッチすることになったちゃったんだけど
……アソコがね……すごく大きくてね……それでね…」

ユウスケ君は唖然とした表情で二人を見ている。

「これ見て分かると思うけど……まっ、彼のものになったから」



ユウスケ君の眼がだんだんと潤みだす…

それを見て、少しだけ申し訳ない気持ちになる。

「私…もう行くね。…今日も、呼ばれてるかな」

呆然と「ドーム」の山を見つめているユウスケ君を尻目と、私は席を立った。



校門を出ると葛男君が待っていた。

初夏のさわやかな風が吹き抜けていき、
梅雨が終わったことを教えてくれた。

隣を歩く葛男君を見上げながら私は尋ねた。

「……今日は、どうですか…?」

彼はまた、悪魔のように「タリ」と笑った。





























































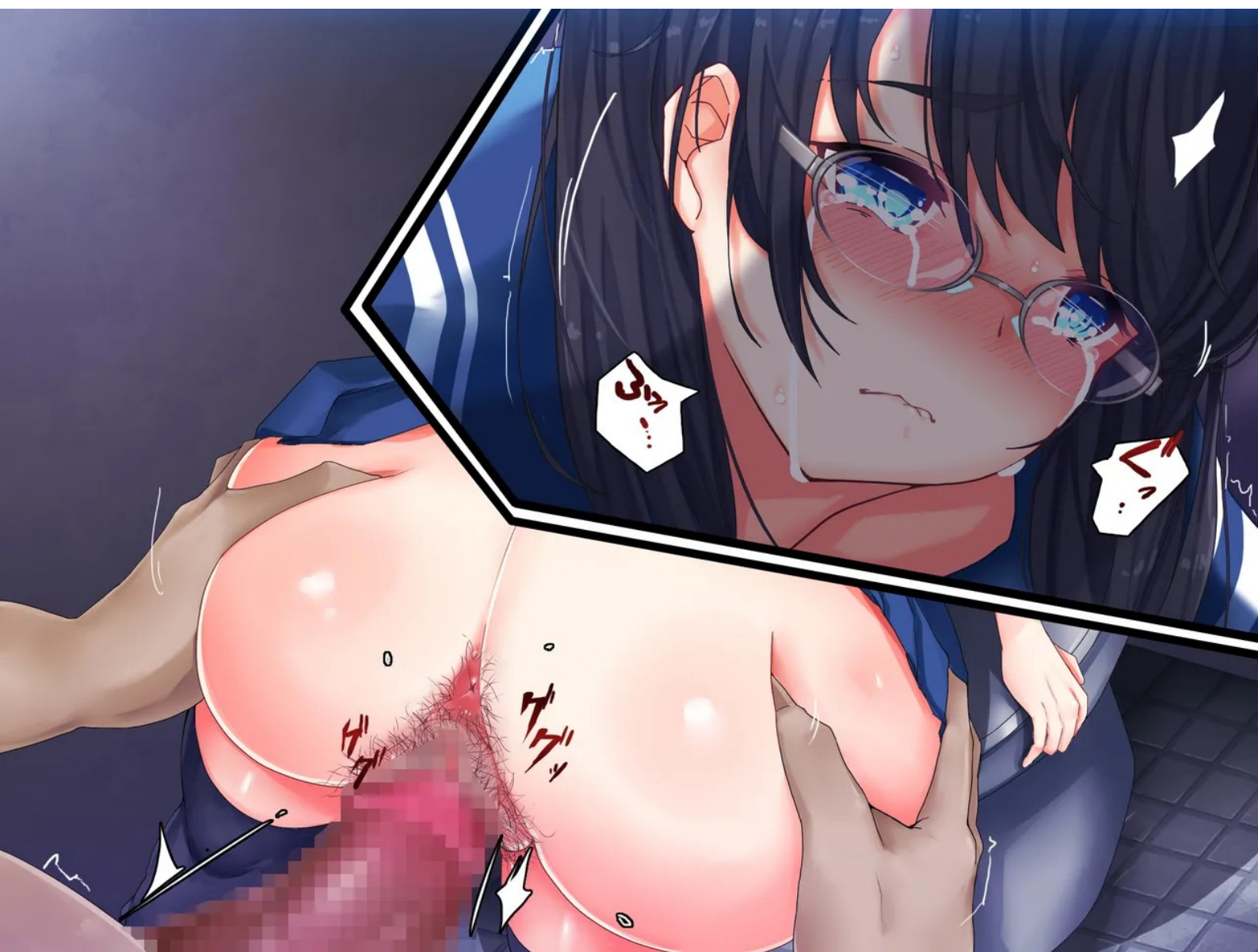


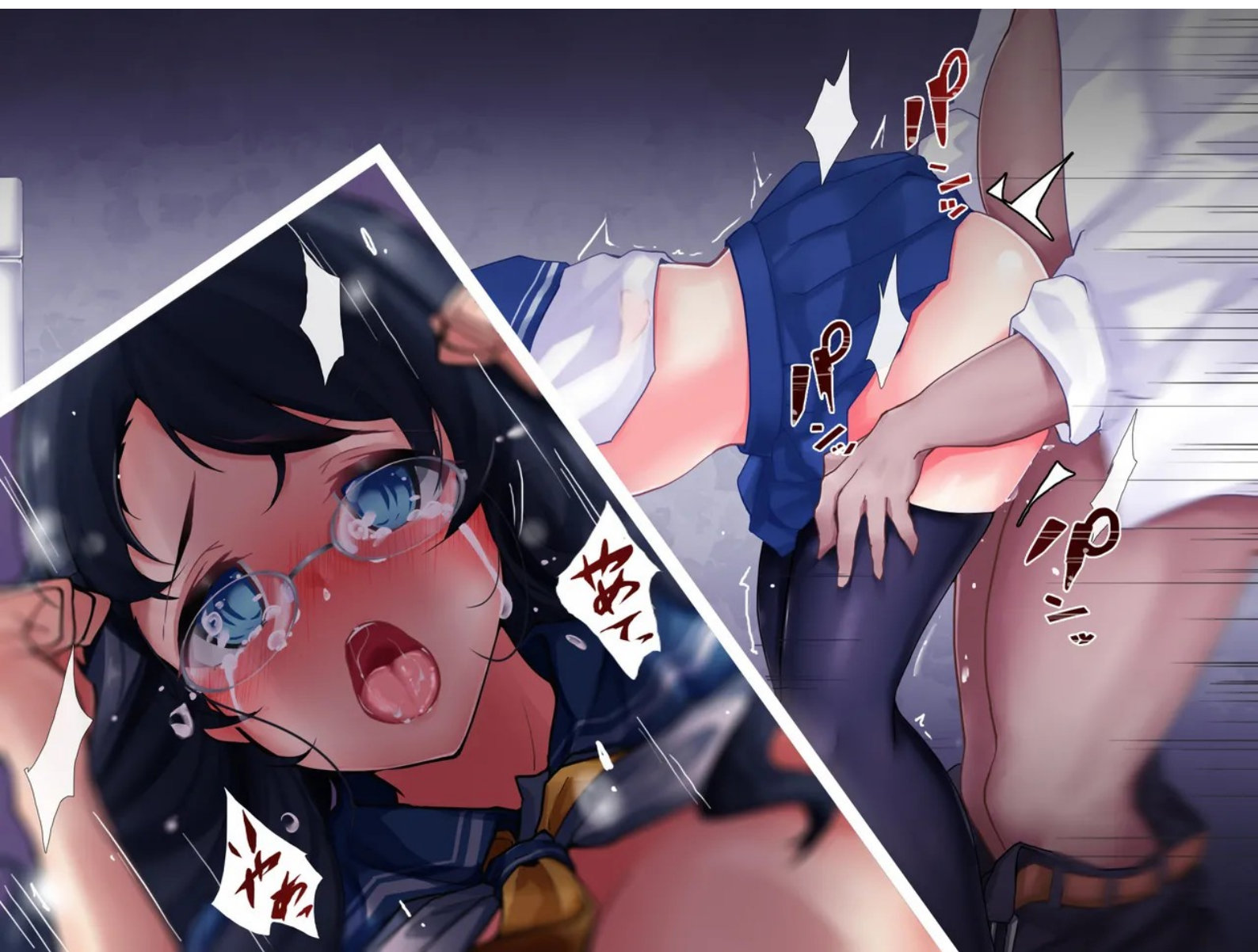






























グチュ
♡

グチュ
♡















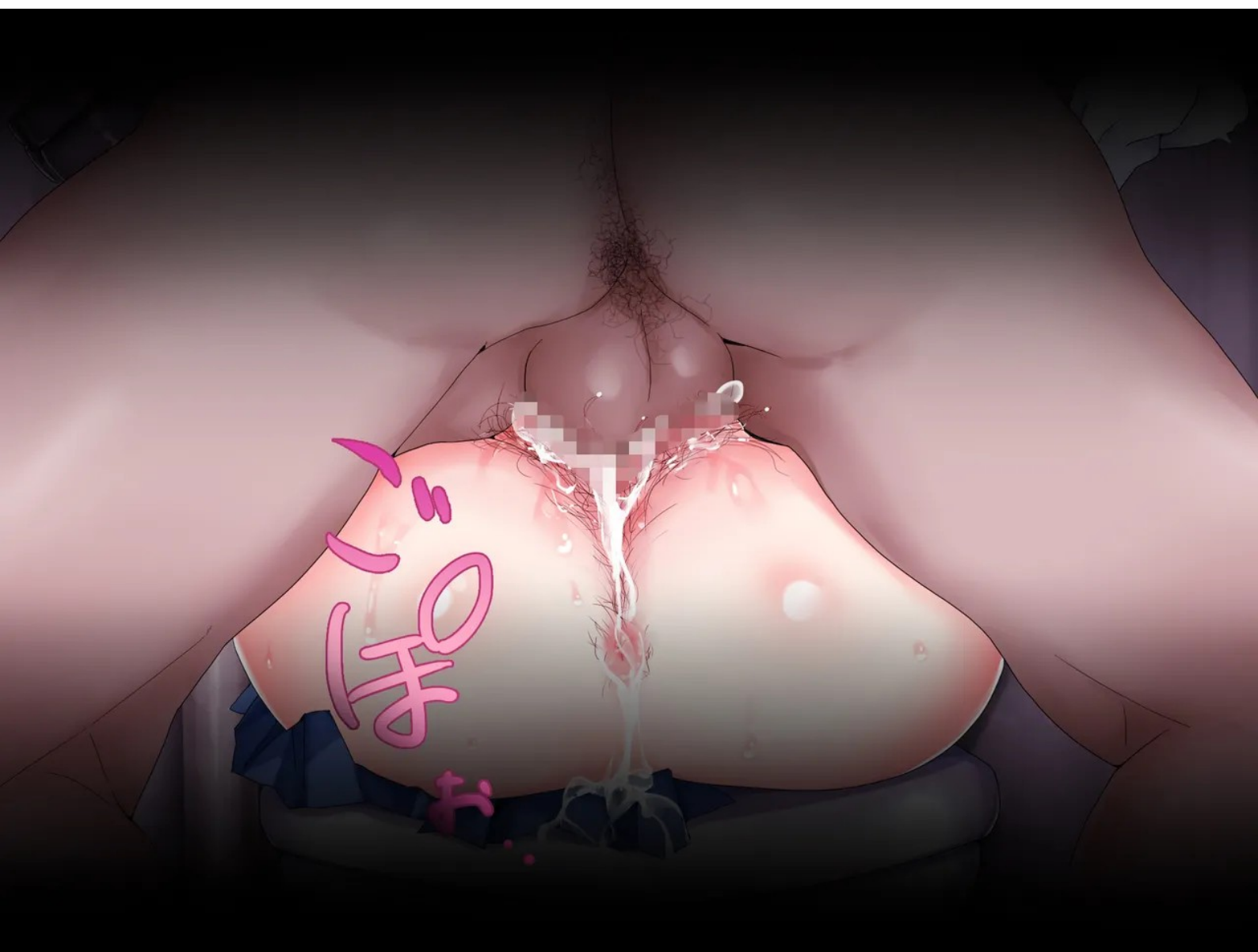




























































はぁ...
あゝ

妙々































